

## 20年後に：68年5月再訪\*

ダニエル・シンガー

玉垣 良典 訳

共産主義の妖怪は西ヨーロッパを徘徊してはいない。パリはもはや革命的希望の首都ではない。長い中断の後にそこに立返った訪問者には、これが20年前には既成秩序が震撼しつつあり、想像力が権力を握ったと思われたその同じ街である信じることがほとんどできない。皮肉なことにその20周年を祝うためにフランス人たちは、その外見上の華やかさと情熱にもかかわらず、いかにしても体制の本性を問うことのない総選挙の一つを上演した。すなわちそれは英国、西ドイツ、あるいは合衆国において行われる同様の投票以上のものではなかつ

\* Daniel Singer, Twenty years on: May 68 revisited, MONTHLY REVIEW, June 1988.  
COPYRIGHT © 1988 by Monthly Review Inc. Reprinted by permission of Monthly Review Foundation.

## 目 次

フランスの5月とその特殊性.....	2
復 旧.....	5
経済危機は政治的景観を再形成する.....	7
左翼のイデオロギー的敗北.....	10
共産主義者の生んだ空白.....	11
正常化と5月の亡霊.....	14
《訳者あとがき》.....	17
<編集後記>.....	22

た。必要な変更を加えて (Mutatis mutandis) プラーハは「正常」へ復帰した唯一のヨーロッパの都市ではない。そのことは1968年5月の反乱によって掻き立てられた希望がたんなる幻想であったこと、反乱に立ち上がった学生やストライキ労働者たちによって劇的な、すくなくともユートピア的なやり方で提起された争点が重要でなくなったということの意味するのであろうか。その反対のことを論ずる試みをする前に、私は私のかねてより抱いている関心を明らかにしておきたい。

突然のフランスの危機が資本主義社会のきらびやかな表面の下に隠された不満の深さを示した時、私は『革命への序曲』<sup>(1)</sup>という感銘的なタイトルをつけた本のなかで、マルクス主義がその本来の配置に復帰しつつあるのではないかもしれないという問題を提起した。当然のことながら私は出版社がタイトルに疑問符を付すことを好まなかったこと、あの本の読者のすべてが認めるように、楽観的なメッセージはあらゆる種類の限定句によって予防線が張られていたと言訳をすることができる。しかしながらこのような言訳は余計なことであろう。再び「生命の黄金の木」は一切の理論的予測よりはるかに緑であることを実証した。資本主義は永続的成長の秘密を発見したということを否定したわれわれでさえ——当時われわれは多数ではなかったが——大きな経済的危機がまさにコーナーを回ったところであり、やがて政治的地平を全く一変させるであろう（逆説的にも短期的には既成勢力を強化しラディカルな反対勢力を弱めつつ）とは知らなかった。フランス共産党がその革命的生得権を選挙という一皿のポタージュとひきかえに売渡すことを非難したわれわれでさえ、社会党の勢力回復を助け、フランソワ・ミッテランが「正常回復者」の役割を演ずるのを助けることで、その罰をかくも速やかに支払うことになろうとは思わなかった。マルクス主義の教科書で、支配的イデオロギーは支配階級のイデオロギーであると学んだわれわれでさえ、資本主義がいかに速やかにこの課題を遂行するか、知識人たちがいかにたやすく裏切りに買収されるか想像しなかった。これら失望の年月は同時にきわめて教訓的であった。だが事実を眺めそれから教訓を引出す前に、われわれは少なくとも新しい世代のために、ごく手短にでもあの5月の素晴らしい月に実際に起こったことを想起しなければならない。

## フランスの5月とその特殊性

5月3日パリ大学の学長が2, 3百人の学生活動家を立退せるために、たぶん上部の命令のもとずいてソルボンヌに警官隊を導入して時に全てが始まった。この極めて例外的な動きは異常な結果を伴った。「首謀者」は逮捕され、学生達は言葉による抗議をしなかった。学生達はパリの舗道の敷石で反撃にで、それは間もなく激しい警官隊の消火弾の応酬にあった。

流血の小競合いと楽しげなデモンストレーションの一週間がそれに続いた。抑圧が強ければ強いほど、殴打され逮捕される学生の数が多ければ多いほど、運動はそれだけ強く盛上がった。学生ストライキは全国に広がった。教授、研究者、郊外からの若い労働者がパリのデモに加わった。5月10日まで拡大する運動のリーダーたちは、もはや時を稼ぐことができなかった。政府が抗議者たちの主要なスローガン——「われわれの仲間を釈放せよ」——に応えることを拒否し警官隊でソルボンヌを包囲したとき、彼等はデモ参加者に解散して家に帰るよう告げることができなかった。カルティエ・ラタンに止まり、齒の先まで武装した警官と対峙しながら、学生たちは自発的にバリケードを築き始めた。全国民は劇的な対決を注視した、あるいは多くの対話がラジオで活発にかわされたので、それに耳を傾けた。政府は妥協を選ぶであろうか、あるいは敢えて全面衝突に進むであろうか？午前2時街頭からデモ隊を一掃するよう命令が下された。明け方にカルティエ・ラタンは痛ましい光景を呈した。小突かれ叩きのめされて学生たちは軍事的に敗北し、政治的に勝利した。政府は今や前日まで交渉にすら拒否を表明していた全ての問題で譲歩した。左翼諸政党、とりわけ直前まで学生たちに法と秩序についてお説教していた共産党は、学生たちの後ろに結集するほかはなかった。5月13日パリはかつて見られたうちで最大のデモンストレーションの一つを目撃した。百万人あるいはそれ以上の人々は「学生、教師、労働者一団結」の旗を先頭に行進した。そのスローガンは一つの前兆であった。

公式の考えではこの荘重な行進は終わりの始まりであるはずであった。それは始まりの終わりであることが明らかになった。学生たちは勇気は報いられたこと、だが強力な国家は不屈であることを教えた。大デモ行進の翌日最初のストライキがナントの近くで始まった。翌日にはノルマンディーのルノー自動車工場の転機を迎えた。その夕方この国の最大の労働組織である共産党指導下のCGTは、運動を統制下におくことを希望して運動に加わりそれを拡大することを決定した。それは潮が国中を洗い流し、州から州へ、部門から部門へと侵入する潮時であった。10日後ストライキ参加者の数は1千万人、あるいは労働人口のほぼ半数（アメリカの対応する数字にあてはめればほぼ6千万人になろう）に達した。国中が麻痺した。

すべてが停止状態に陥った時、心は違ったふうに動き始め、危機は性質を変えた。学生たちは声高に、世界を変化させることについて夢を語り始めた。技術者、研究者、教師たちは社会における自らの機能について討論を始めた。一方でいくつかの占拠された工場の労働者たちは、生産における自らの役割と階層的秩序の意味について語った。多くの工場に赤旗が翻り、雇主とその政府は仕事に帰る潮時だと結論を下した。CGTは意を迎えるに熱心であっ

た。5月28日夜革命的學生とその同調者たちは、「われわれすべてはドイツのユダヤ人だ」と歌いつつ、学生寮の中で象徴的なボンファイヤーを燃やした。次の日の土曜日政府、雇主と労働組合の代表者は処理を探るために一緒にテーブルを囲んだ。労働者への譲歩、主として大幅な賃上げの約束は通常の基準からすれば極めて印象的なものであった。ただ時期だけが異常であり、月曜日の朝ブローニュ・ビランクール工場で支持労働者に対面するために、そこから直行したCGTの指導者たちはおそらく条件付承認以上のものを期待していなかった。彼等が予測しなかったことに回答は全面的拒否であった。この鳴響くノーの声はフランス中の工場に反響し、予期しない第3幕が切って落とされた。つまりあらゆることが明らかに可能であるとみえたその瞬間に政治的空白期の3日間が。

運動のダイナミックな翼は、それがどこへ向かうか知らないままにシャレティ・スポーツ・スタジアムに勢力を結集した。左翼政治家たちは彼等の出番がきたと考えた。ミッテランは無力化したド・ゴールが退陣するだろうと考えて後継大統領立候補の意思を表明した。この間事態はピエール・マンデス・フランスを主班とし共産主義者を含む政府によって乗切り得たであろう。目下のパートナーとして扱われるのに肯じない共産主義者は彼等の力の印として印象的な大衆デモンストレーションを上演した。政府はパニック状態にありド・ゴール将軍は姿を消した。実際にすべての人が彼を埋葬しつつあった時にド・ゴールは復活の過程にあった。その時まで社会運動が高揚するにつれて彼は力を失ったように思われた。だが今までに彼は次の決定的な教訓を掴んだ。つまり共産主義者たちは運動を押し進めることを望んでおらないこと、もし公然と挑戦されるならば彼等は自ら運動を動員解除するのを助けるであろうということ。情勢を劇的に示すためにド・ゴールはアルジェリア戦争で名高いマッシュュー将軍の率いる軍隊の祝福を受けるためにバーデン・バーデンに旅立った。5月30日にパリに帰って彼は総選挙を布告し、国を麻痺させることによってそれを妨害しようと試みる全ての者を威嚇した。彼のラジオ放送が終わるやいなやそれは彼の支持者たちにとってデモンストレーションへの転機であった。

シャンゼリゼーでのドゴール派の行進は5月13日のパリを横断した左翼のデモと同じ数に達しただろうか。多分そうではまったくない。しかしそのことは問題ではない。二つの巨大なデモンストレーションは国が二つに分裂したことを象徴していた。それは一続きの事件として正面衝突のコースを辿っているように見えた。その翌日CGTの共産主義者の指導者ジョルジュ・セギは、彼の同盟組織は何ものも妨げないであろうこと、トップだけでなくあらゆるレベルで交渉することを熱望していると宣言した。労働部隊はかくして解隊した。未完の烽起は選挙の準備ではないことを知りながら、共産主義者は選挙の敗北を選択した。スト

ライキを終わらせることはむしろ困難であることが判明したが、右翼は6月30日までに正式に部署に復帰した。事件 (événements) は事実上終わった。

以上できるだけ簡潔に要約した諸事件からいかなる教訓を出すことができるか。もしフランスの危機が5月13日の行進で終わっていたとするならばその年に、パークレーから東京に拡がった他の学生反乱とドラマと色彩においてほんのわずかばかり違っていただけであろう。フランスと後にイタリアを質的に違ったものとしたのは、たとえ曖昧で共産党のフィルターを通したものであったとはいえ、労働者の反応であった。パリにおける学生反乱はこの国の歴史上最大のゼネストを促進した。集権化した体制すなわち選挙された君主制において、権力の問題が急速に日程に上った。さらには経済の累進的な麻痺は人々に一切の価値と制度を問い直すよう導いた。ただそれだけであり、それ以上ではなかった。直接の革命的な解決は決して問題になっていなかった。それを欲した人々——学生たちや革命的な小グループ——はその力をもたなかった。それを為しえた、あるいはその生得権としてその能力を要求した人々——共産主義者——はそれを欲しなかった。(状況が潜在的に革命的であったか否かは、この文脈では重要ではない。共産党は他の全ての政党と同様情勢を選挙戦術の観点で眺めて、運動を行けるところまで押進めるのを拒否した。)

もう一つの特徴はかなり古典的であった。若い反抗者たちは明日の問題を取扱うのに昨日の衣装を纏っていた。運動を鼓舞しそれに方向感覚を与えた活動的な少数派は、冬宮の権力掌握を再演しつつあると感じていたかもしれないし、かれらのリーダーの幾人かはレーニンあるいは毛沢東の役割を演じていると感じていたかもしれない。だがそれは長い間モデル無しに闘われた最初の西側世界での反乱の一つであった。すなわちソビエト・モデルは信用を失っていたし、これは共産党との問題の一部であった。当時流行の「文化革命」は中国の原型とはあまり関係がなかった。たとえしばしば粗野でぎこちない言葉ではあれ、若い反逆者たちは先進資本主義の当面する諸問題と結びついた疑問を提起しつつあった。すなわち生産物の分配のみならず成長の目的そのものを、ヒエラルキー的な分業あるいは衰えることなき国家の人工的な拡張の理由は何かという疑問を。彼等の解決はいかにユートピア的であろうと、彼等は革命的な代替案を手探りしつつあったのであり、未来を垣間見つつあったのである。

## 復 旧

当然のことながら1968年の総選挙は何等の終わりをももたらさなかったし、その結果は計算外であった。ほんの一例をとれば、1969年のド・ゴール将軍の辞任は、前年の危機の直接

の結果であった。しかしながらフランスの既得権保有層(establishment)にとって最も重要なことは、現体制への代替案の瞥見の記憶を抹殺することであったが、このことは、それが主としてその支持者たちの関心事であったがゆえに、尊敬すべき左翼に委ねられた課題であった。彼等の選挙民につき二つのポイントを納得させるのは、社会主義者と共産主義者に至るまでの仕事であった。すなわちそのポイントとは、ラディカルな変化、革命的決裂への信仰の再生は幻想にもとづくものだということ、他方において投票用紙の適当な使用は人々に「国の進路の変更」(共産党の綱領のタイトル)あるいは「生活を変える」(社会党の綱領のタイトル)ことを可能にすることができる、ということであった。共産党は、[社会党よりも]社会的により強力であり、驕りのみえた「革命的」声望の代替物を得る必要をより強く感じていたから、より大きな譲歩をする用意があったが、それは今日振返ってみれば皮肉に思われるかもしれない。1972年までに二つのパートナーは5月運動にたいする彼等の対位法を産みだした。すなわち決裂なしに現存の諸制度の枠内で重要な諸改革が漸次的に遂行されうると論じた共同政府綱領がそれである。

それは社共両党にとって長期間を要した。何故なら抗議運動のエネルギーはまだまだ消尽しつくすには至っていなかったからである。それは学校、大学および文化メディアにおける支配的イデオロギーを堀り崩した。それは労働倫理への信仰を衰えさせた。そしてそれはなお拡がりつつあった。この半世紀の二つの決定的に重要な新来者——エコロジー運動とフェミニズム——はフランスではいずれも遅れて発展したもので、1968年以後生まれたものであって、1968年以前にはなかった。もしその支柱が堀崩されつつあったにもかかわらず、イデオロギー的建造物がなお建っていたとするならば、様々の潮流がめいめいそれ自身の方向を求めたために合流することがなかったためである。

同時に「小グループ」——トロッキストであれ毛主義者であれ、はたまた自由論者であれ——は集団(政党にはならなかったけれども)となった。毛主義者の「左翼プロレタリア」またはGPは、その有名な仲間の旅人ジャンポール・サルトルの助けで一時間間の注目をさらった。それは獄中者の苦境とか移民労働の搾取といった重要な問題に注意を集めるよう操作した。だがそのプロパガンダは人目を引くとおなじく粗野であった。GPはそこではすべての夏は熱いはずであり、外国人労働者はプロレタリアートの前衛であり、共産主義者(すなわち「修正主義者」)は「主要な敵」であり、そして革命はまさにコーナーを回ったというような偽りの世界に住んでいるように思われた。かかるヴィジョンに適合することを拒否する現実、すなわちこの種の組織〔資本主義体制〕は即刻倒壊するはずであった。\*

だがGPだけではなかった。結局短命なことを証明したのは運動全体であった。想像力は

1968年以後決して権力を握らなかつた。政党の役割を問いながら、5月の運動は組織的代替物をけつして発明しなかつた。それは闘争する諸党派をともにあわせて長期的行動に向かわせることのできる企画を決して仕上げなかつた。それはヘゲモニー的連合の輪郭を描くことをしなかつた。かくしてこの時期の標識となつたすべての諸問題を提起しはしたが、5月運動はけつして現実的な代替案とは見えなかつたし、またそれなしには共同綱領は、それがどんなに感激のないものであろうと、唯一可能な「解決」として漸次出現した。

もし5月運動を既存の資本主義社会の限界を超える解決へ向けての手探りする勢力として定義するとすれば、1973年にブサンソンのリップ時計工場の労働者たちによる工場占拠の時の最後に見られた集団的な行動あるいはむしろ反動であつた。この「ワーク・イン」(work-in)のリーダーたちは、彼等のやうなことが自主管理の、autogestion の一ケースであるとは主張しなかつた。諸君は単一の工場の中で社会主義を建設するのではない、と彼等は言つた。だが民主的手段で彼等の機械を運転し法律を完全に破つて戦闘的な販売網を通じて全フランスに時計を販売した労働者たちは、異議申立てのイメージを擱んだ。実際にジョルジュ・ポンピドーの死が1974年の大統領選挙に急転した時、リップのリーダーだつたシャルル・ピアジェをニュー・レフトの象徴的候補として担ぐという問題があつた。

それは実現しなかつたけれども、このアイディア自身その時までには選挙への執心がどの程度にまで達していたかを示している。実際1974年の大統領選挙はフランスにおける社会民主主義の潜在的上昇の最高点を印したと言ふことが出来よう。その少し前に選ばれた社会党の第一書記、フランソワ・ミッテランはそこで統一した左翼の大統領候補であつた。共産主義者は義務感からもむしろ熱心に同盟のなかでの目下のパートナーとしての彼等の役割を果たし、二つのパートナーは日本の成長率並の上げ潮の希望に満ちた予想のもとに選挙戦に入つた。そしてミッテランは僅差で勝利を逸した。

### 経済危機は政治的景観を再形成する

歴史の皮肉はフランス社会民主主義の成就に近づいた1974年のこの瞬間が、またその成功の前提条件が現実には崩壊した時でもあつたということである。その年に襲つた危機は原油価格の高騰によって惹きおこされたものではないということ、利潤率の低下によって十分に告知されていたということは、その時までには一般に認められていた。他方で石油価格の劇的な

---

\* なゼイタリアやドイツのように、テロリズムに導く線を越えなかつたかは、もっと長い説明を要する他の問題である。

上昇はその過程を促進し危機を一般公衆に暴露した。実際、資本主義は永遠の成長の秘密を発見したという信念は非常に強いものであったから、経済危機はすべての人々——左翼、右翼および中道をふくめて——を驚かせた。ここでこの危機の性格を分析し、あるいはそれから結果する苦境から体制がいかなる形で立ち現れるかについて考えをめぐらすことはその場所ではないが、危機が政治の方程式を完全に変えてしまったので、われわれは一般にヨーロッパ左翼にとって、特殊にフランスの運動にたいするその諸結果を見なければならぬ。

1974～1975年のショックは、前例のない繁栄と人口の社会的構造の深い変化の30年間の後に訪れたがゆえに、驚天動地の出来事であった。想起しなければならないが、5月の反乱はこの繁栄の長期循環のなかで生じたものであり、他方経済情勢は明らかに良好な進行を示していた。反乱は「奇跡」の裏側すなわち閉じこめられた不満の深さを暴露した。しかしながら、一世代のうちに生活水準が二倍になったことは、5月の運動の反対者たちが現存の体制の内部でも生活を変えることが出来ると抗弁するのを助けた。フランスにおいて戦後期における最も目覚ましい社会的変化は、おそらく田舎から都市への住民の大量移動であった。農民の事実上の消滅は工業労働者の緩慢な成長とホワイト・カラー労働者のはるかに急速な膨張と結びついていた。ブームの年々には大量の外国人労働者の輸入を必要としたが、他方第三次産業への雇用のシフトは労働市場への婦人の大量流入を含んでいた。危機はこの最後の傾向を維持したが、ほかのすべてのものに影響を与えた。外国人労働に国境を閉ざしたにも拘らず、工業の沈滞は大量失業の回帰に導き、それは鉱山業、鉄鋼、自動車産業、造船業といった伝統的な労働階級の本拠であった諸産業にとくに打撃を与えた。労働組合は、たとえ戦略をもっていてもこれらのすべての傾向に対抗するに困難を覚えたであろう。だが彼等は明らかにこれに対抗する戦略を持っていなかった。

政治的には、尊敬すべき左翼はむしろより途方に暮れた。資本主義経済の相対的成功はコミュニストでさえ、ソビエト・モデルが騒いだせいで、体制内の解決を求めることで諦めた。フランスでは左翼は条件付の反省に導かれて新しい状況に直面することを拒否した。1981年左翼は完全に對外競争にさらされている国で何事も起らなかったかのように、見事なケインズ主義的プログラムをひっさげて政権の座についた。これがその急速なイデオロギー的実践的破産の一つの理由である。

旧左翼の失敗は新左翼の成功を意味しない。ある意味では経済危機によるラディカリズムの一時的な鎮静化は珍しいことではない。短期的いな中期的にみて失業は労働階級の気分を穏健化する傾向がある。だが今回は変化はもっと深刻だった。1960年代は新しい傾向をつくりだした。労働運動のいくつかのセクションは質的な要求をつきつけ、体制の論理を問題に



し、いわば不健康な労働条件にたいする貨幣的補償を拒否し、労働時間の短縮と労働組織にたいする労働者統制のある種の形態をすら求め始めた。だが経済危機によってうみだされた社会的空気は、この発芽しつつある植物の生育にとってはなはだ都合が悪かった。人々の直接の関心事が職を得ること（あるいは保持すること）である時、誰がたとえどのような種類のものであれ「仕事を豊かにする」こと、あるいは意義ある仕事について思い煩うであろうか。

さらにもっと悪いことが起こらずにはすまなかった。質的諸要求が、イタリアでは「構造的改革」の要求として知られ、フランスでは「革命的改良主義」の要求として知られる戦略と結びつけられた。その目標はつねにやや曖昧であった。この戦略の主唱者たちが主張するように、改革は資本主義社会の限界を超えて導く連鎖の環であったのか、それともそれら諸改革は資本主義社会を改善しその延命を保障することを意図したものであったのか。フランスでは経済危機とそれに続く左翼の政権獲得は明瞭な回答を与えた。いわゆる「第二次左翼」の代弁者——ミシェル・ローカルや社会主義閣僚ジャック・ドロールあるいはCFDTのリーダーのエドモン・メール——は生じうべき疑問を消散させた。彼等にとって資本は究極の地平であり、柔軟性はシステムをよりよく機能をさせることを意図したものであった。それは妥協ではなく降伏であり、彼等の行為はラディカルな代替案の探究と見えたものを、少なくとも一時的に信用失墜させることにならざるをえなかった。

だが先取りしないことにしよう。経済環境の激変は純粋な論理にしたがって、左翼よりも右翼により大きな影響をおよぼすことになった。結局それは資本主義のイメージをその真の色彩にまで復活させ、そのうえなお「恐慌なき資本主義」という流行りの新しい神話を破壊しつつあった。成長の福音は西側世界の宗教となり、大衆の平等主義的欲求にたいするエスタブリッシュメントの完全な対応物となった。いまやこの煙幕は消散し、資本主義社会の本性は、大量失業によって再び実証されたその不公正、不平等、不合理性とともにはっきりと見てとれるように思われた。ここに危機に陥ったこの社会にたいする急激な反動が様々の抗議の運動を一本にまとめて、それらに共通の目的を与えて、散発的な対決を正面攻撃に転化させ、小競合いを決定的な戦闘に転化させる重大な危険があるように思われた。逆説は次の点にある。1968年によってしたたか揺すぶられ経済危機によって明らかに脅かされた西側世界の右翼が、そのなかに見事なイデオロギー的復活の手段を見出したということである。フランスはいかにして西欧資本主義が収容所 (gulag) なしに正しい時と正しい場所でその延命に必要な「普遍的理念」を生みだしうるかを示す良い見本である。

## 左翼のイデオロギー的敗北

かくして資本主義的エスタブリッシュメントがもっとも恐れたことは、経済危機が統一した行動の脅威を招来することであった。それゆえ必要とされたことは、全体的な計画の探究そのものを悪と判定するイデオロギーであった。われわれのシステムはいかに悪いものであろうと、「時々試みられる全てのもの」よりも良いと宣言することは、もはや十分ではないが結構なものであった。というのは若い反乱者たち自身がソビエト・モデルを放棄したからである。個人的反乱はたとえ正しいものでありえても、集団的行動の全ての形態は社会を巨大な強制収容所に転化させることにならざるをえない、ということを彼等に納得させることが不可欠なことであった。このことは1970年代に必要なメッセージであったし、それがソルゼンチンの『収容所列島』の助けを借りていわゆる「新しい哲学者」によって筋書き通りに伝えられたメッセージであった。ここでは借物のアイディアで全体をつぎはぎした『躓いた神』のこの安物の改造品の知的内容について思い煩う必要はない。われわれの目的にとって興味があるのは、プロパガンダにおけるこの運動の驚くべき成功と、とりわけ革命的解決の害悪に反対する伝道者に転じた「5月の子供」がそこで演じた欠くべからざる役割とである。だが少数の変節者の重要性を誇張しないために、人はこの運動といわゆる新しい階層の間の関係をそれに固有の文脈のなかに位置づけなければならない。

1968年に社会にたいし反乱を起こした学生たちはまた、彼等の将来を疑問に付していたのであり、かかるものとして教師、研究者、社会福祉事業従事者、彼等自身の役割に恵まれていないすべての種類の幹部要員(cadres)の間に反響を見出しつつあった。1968年はそれが急速に変化しつつある労働者階級(新しく疎外されたホワイト・カラーと社会的辺境にきわめて接近していた高度熟練技術者を含む)と専門職のインテリゲンチヤの急速に成長しつつある部分との間の同盟の輪郭を示した限りでは、来るべきものの前兆として描くことができる。それは中産階級との結婚を予示したのではなく、後者の内部での亀裂を予示していたのである。だがそれはほんの徴候にすぎなかった。運動の敗北とともに、また新左翼が信頼できるオルタナティブとして登場するのに失敗するとともに、一時は誘われたこれら幹部要員は彼等の長期的利害ではなくその短期的利害を防衛するための他の解決を求めなければならなかった。ついでながら、共産主義者にたいする社会主義者の選挙での優越は、これらの「新しい階層」への求愛に後者が成功したことに大部分負っていると論ずることができる。

心に留めておかねばならないもう一つの点は、変節者は典型的ではなかったということである。1968年に活動した多くの若者たちは一旦運動が崩壊すると、彼等自身の花園を耕すために復帰し、彼等の専門職業にそのエネルギーを捧げたし、たとえ社会党に糾合すべく身を

投じた時でさえ、何等の幻想を抱くことなく、止むを得ず (faute de mieux) そうしたのである。もっとも世の注目を集めた人々は、昨日は資本主義の死滅を予測し内乱を主張したのと同じ情熱をもって、今では資本主義の永続性を、あるいは左翼にとって私企業を愛することの必要性を説くような、まさしくそういった人々である。実際に新しい哲学者に転じた何人かの毛沢東主義者の場合には、その思考様式を変えずにその思想を変換した。彼等はマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリン、毛沢東、林彪の言葉を繰返すのを常とした。そこで10年後になって同じプリミティブな仕方で、ただその方向をひっくり返しただけで、彼等はカール・マルクスを「収容所」(gulag)の先祖として描いたのである。フランスの転向者の特異性と彼等の宣告をかくまで嫌なものにしたのは、彼等の一人よがりや自己満足とであった。彼等は彼等の現在に満足しているのと同様に彼等の過去を誇りにしているように思われる。このフランス種の転向者は後悔するよりむしろ昂然としている。

風見鶏ですら安定要素が、つまり風とともにその回りを回転する軸が要る。フランスの改宗者にとってこの安定性は「反共産主義」によって与えられた。もっと正確に言えば、言葉は同じでも内容はそうではなかった。資本主義の再生したチャンピオンは、フランス共産党を不十分な反植民地主義者として攻撃するのを常とした。何故なら共産党はアルジェリアの反乱者を十分に後押ししなかったし、FLNの勝利を言う代わりにたんにベトナムの平和を主張したに止まるからである。今では地球上の不幸な人々よりも白人の負担が彼等の語る言葉に目立ってはいるが、彼等はなお自分自身に忠実である。何となれば彼等は依然反共産党であるからである。昨日彼等は共産党の常任活動家をその大義にたいする逆賊との焼印を押し、CGTの首領を労働大衆と権力の間の主要な障碍として描いた。今日革命は彼等にとって最高の罪であるが、彼等は依然その「反共産主義」に忠実である。彼等はその生涯の人為的な連続性の唯一の要素としてこの概念にしがみつかねばならない。実際彼等はその達成にむしろ誇りを持っている。彼等は自分の国に偉大な奉仕をしたのである。彼等は強力な共産党の影響から逃れる上での第一の発起人であった。<sup>(2)</sup> だがそれはそのような偉大な奉仕であったであろうか、彼等はあまりにも多くを要求したのではなかったであろうか。

## 共産主義者の生んだ空白

第二の問題はきわめて容易に答えることができる。彼等はその重要性を誇張している。フランソワ・ミッテランはCPの規模縮小のためにははるかに多くのことをし、ジョルジュ・マルシェー——ここでは象徴的にCP指導部全体をしめすものとして挙げる——は、そのために比較にならぬほど多くのことをした。釣合いのとれた見方をするならば、過去20年間

のフランス共産党の行動は、あたかもそれが死への願望によって、つまりある種の自殺への脅迫観念的な情熱によって導かれたかのようである。

1968年5月は疑いもなくCPのこの劇的な下降に重要な役割を演じた。その本質的に選挙中心主義的方向はもっと早くから始まっていた。しかしながら1968年の危機は、レトリックはどうであれ、党は何等革命的代案を持っておらず、それゆえ社会主義者との人民戦線的同盟は至上命令であったことを暴露した。フランス共産党は状況を利用して、彼等のイタリアの友党のように、フランス左翼のなかでヘゲモニー的ポジションを獲得することができなかったであろうか。そうするためにはフランス共産党はもっと早くモスクワとの密接な結合を破棄し、それ自からの転換とともにもっと速やかに前進しなければならなかったであろう。党は半分乗り気、半分は気乗り薄で、中途半端な措置を講じ、二つの方向に動き、ついには二つとも失ってしまった。

マルシェの指導下でCPはプロレタリアートの独裁のようなその主要概念のいくつかを脱落させた。それはなんらの真の討論もなく、その結果として生ずるイデオロギー的空白を埋める試みもなすことなくおこなわれた。以前フランス共産党は1968年のソビエトのチェッコ進入を非難したが、それはただ後にその「正常化」に再び署名するためにすぎなかった。それに続いて70年代半ばには「ユーロ・コミニズム」の局面でモスクワから距離をおいたが、それも後になってアフガニスタンへの侵攻とポーランドにおける連帯にたいするヤルゼルスキー将軍のクーデターを是認するためであった。

社会主義者との関係もこれに劣らず矛盾したものであった。始めに共産主義者はパートナーを必要としたので社会主義者の復活を助けた。そこで同盟がより穏健なパートナーに有利に働くことがわかったので、彼等は突然社会主義者がなんら「革命的」でないのを発見した。1977年に共同行動協定を破棄して考えられないこと——翌年の議会選挙での左翼の敗北——をもたらした。三年後彼等はその代価を支払うことになった。すなわちマルシェは1981年の大統領選挙の第一次投票でミッテランに手痛く打ちのめされた。そこで共産主義者は何等の前提条件もつけずに彼の政府に入った。彼等は耐乏の2年間を含む3年間実質的影響力もなく閣内に止まり、そしてこの政府は以前のいかなる左翼内閣よりもましであると宣言した。彼等の閣僚辞任の翌日に彼等はこの政府をブルジョワ的裏切りと呼んだ。

実際共産党の没落の主な原因はたぶん彼等自身の行動であった。CPは自らの現在の無謬性には何の疑いも投げかけなかったが、1968年における振舞いを含めて過去の間違いを認める用意があった。<sup>(3)</sup> CPは何年もの間「左翼主義者」の罪として拒否してきた自己管理、すなわち有名なオートジェクションに改宗さえした。だが毎年如く繰返される党内討論の封

殺と相次ぐ反対派の排除が、CPは上部から出てくるのではない何ものかとしての権力というものを考えることができないということを確認した時に、誰がこのような改宗を信ずることができたであろうか。それは勢威喪失に値しただけであり、それは劇的な勢いで実現した。選挙の道にコミットした党にとって、その低落の里程標は明白に読取れる。1968年以前にはCPはフランスでは投票総数の20%を優に上回る得票を上げるのがつねであった。1981年の大統領選挙ではジョルジュ・マルシェは15.5%を獲得した。1986年の議会選挙ではCPはルパンと並ぶ9.7%に低下した。1988年の大統領選挙ではアンドレ・ラジョアニーは6.8%以下しか得られなかった。<sup>(4)</sup> この結果の問題、つまりこの劇的な凋落の結果の問題が残っている。1968年の出来事から教訓を引出して、サルトルの『レ・タン・モデルヌ』は次の痛烈なコメントを付している。「われわれは共産主義者なしには革命をなしえないことを知った。われわれは今や彼等と共にそれはなしえないことを知った」と。これら数行が示唆していることは、フランスではCPを支持している大衆なしには革命的転換は起りえないということ、これは共通認識であった。この党の指導者はこのような動乱に参加する意図を持っていないことは今や明らかであった。これらの前提から運動は次の結論を引出した。すなわちどのような形態で決裂が実際に生じようと、フランス社会のラディカルな転換は共産党がその本性そのものを変えないかぎり不可能であるということ、いかにすればこの党が片隅に押しやられるまではそれはありそうには思われまいということである。結果として残った空白を何をもって埋めるのかについては意見の一致は無かった。1968年以後の空気の中では、多くの人々はかくして解き放たれた力は真にラディカルな運動によって利用されることは当然のことと考えた。当時はその声は小さかったが、他の人々はCPの消滅は、たんにフランスの北部と西部の隣国のスタイルで、リスク無しに彼等が政治を演ずるのを助けるだけだと考えた。このような期待の共存は、戦後期にフランス共産党が演じた二重の役割を例証する。一方でその声望、その革命的レトリックで、そのマルクス主義的用語によって、CPはラディカルな決裂、政治的行動をつうじて真に変化した生活の可能性への信仰を保持するのを助けてきた。（そしてこのことがフランスとイタリアを例えばイギリスとドイツから区別する点であった）他方でその上部よりの指令的システム、内部生活の不在、そのイデオロギー的動脈硬化症とは、この有利な評判がけっして活用されないであろうことを確実にした。1968年に党はその革命的無能を暴露する状況を創りだすことに部分的に寄与した。それから後にはその運命は定まったのもっともなことであった。障害は次の点にあった。その没落が時代の潮流の転換と時を同じくしたために、新しいラディカルな運動の台頭を助ける代わりに、少なくとも一時的にはフランスの正常化のための土壌を準備したということである。

しかしながらこのためには、フランス左翼はいずれにしても改革の展望が無かったということ学ばねばならない。このことを教えるためには、社会主義者はまさに目下のそして有用なパートナーとしての共産主義者とともに政権につかなければならなかった。

## 正常化と5月の亡霊

フランソワ・ミッテランはつねにフランス左翼の「バランスを正す」ことを欲した、すなわち共産党のウエイトを引下げることが望んだ。そして彼はそれに躊躇しなかった。同時に私は他のところで説明した理由によって、彼が意図的に政権に参加した社会主義者の降伏を計画したとは考えない。<sup>(5)</sup> 左翼の敗北は1981年の選挙の勝利の中に書込まれていたが、この選挙の勝利はイデオロギ的の屈従、社会運動の不在、経済危機の分析の欠如と符合していた。かくも武装解除された社会主義者が、ひとたび彼等のケインズ主義的プログラムが彼等をどこにも導かないことを発見した時、ミッテランは彼の路線を全面的に変更した。彼は社会改革者として月桂冠を獲得することができなかつたので、異なった未来の夢を奪うことによって、フランスを確立した西欧のパターンに導く人として歴史書のなかに降りていこうとしたのである。

20年も経たないうちにフランス左翼の支持者は厳しい試練にさらされた。1968年に彼等は現実的な代替案への漠然とした信仰とともに希望を回復した。もし5月が幻想であったとするなら、議会的手段によって同様な何もかが達成しうるのであろう、ということを彼等に納得させるには少し時間がかかった。その時までには彼等は改宗したように思われ、社会・共産両党の同盟の突然の崩壊は左翼から1978年の勝利を奪った。そこで1981年には魔法から解放された左翼は、大統領選挙で彼等に押付けられた選挙の勝利をえた。それは彼等の勝利というよりも反対側の敗北であった。それでも貰いもののあらは捜さない方がよい。だが幻想の年の後に、左翼は自らの側がその先行者の足跡にしたがっていること、社会主義者の耐乏政策は保守主義者によって実施されたものとたいして違わないということを見出す次第となった。道は希望から希望の空しさと諦めへと導いた。

もし1968年5月が本質的に希望の蘇生、限界主義の終焉、体制の限界を超えた変化への再発見された信仰であったとすれば、ミッテランを5月の墓掘り人と正当に描くことができる。彼は一人ではなかつたし、その称号を得るために出発したのでもなかつた。社会主義者は実際に5月運動の用語を借りて始めた。だがいったん政権につくと、完全にオーソドックスな耐乏政策の主宰者となって、他に代替策は無くまた有り得ないことを、その支持者に説得しなければならなかつた。彼等は支持者に選挙であれ他のものであれ、「奇蹟」を期待すべきで

はないことを説得しなければならなかった。社会主義者とその大統領への支持の低下は、左翼選挙人の間での失望の尺度であった。その支持の回復はそれら選挙人の諦めの印であった。フランスはその隣国と同じく、資本主義の地平を超えては何ものも無いということを受入れなければならなかった。

生誕の日をいかに祝うかはしばしば象徴的な意味をもっている。5月の20周年記念日のために、フランス人は大統領選挙——その主要な意義はその相対的無意義であったが——を舞台に上せた。他の西欧諸国におけると同様に、それは既成の制度に何等疑問を投かけ、体制を脅かし、現存の秩序と衝突する問題を提起するふりをすらしなかった。もし1968年5月が、歴史は決して完全な停止には至らないということ、資本主義を超えた将来があるということの情熱的な再主張であったとすれば、1988年の選挙はその対位法であった。それは5月の記念日の祝いではなく、むしろ時期遅れの葬送の式辞であった。

だが死して正當に葬られたけれども、5月の幽霊は屈服することを拒否する。5月の精神は明らかにもはや生きてはいないが、疑いなく当時よりいっそう適切となっている。1968年が提起した諸問題——成長の意味、社会的分業の目的、支配するリバイアサンの脅威的な規模とその実際の機能——は、経済が外見上将来に向けて鍛えつつあり、所得が増大しつつあり、そして福祉国家が前例を見ない社会保障を確保させつつある時にはむしろユートピア的で非常に緊急的ではないとして退けることができたし、また退けられた。今日何百万人の失業者を抱えたヨーロッパ——ここではわれわれの発明的才能が失業者の長い列に導いており、国家の福祉機能や社会保障一般が脅かされており、これらはもはや抽象的でもなく、また遠い将来の問題でもない。資本主義の制度はそれが妥當な回答を与えたが故にではなく、不平等の精神を養い、働く人々を熟練と非熟練者、良い報酬を得ている者と報酬の悪い人々とに、職を得ている者と失業者とに分割するというふうに管理したが故に支配を続けているのである。左翼は1968年に提起した諸問題と取組み、資本の論理に自らの論理を対置することによって、首尾一貫したプロジェクトのなかで回答を構築するまでは、再び好機に立向かう事ができないであろう。

その好機とは何か。フランスではその本来の利点、つまり代替案への信頼が打砕かれたということは否定できない。その将来は一部は次の二つの関連した問題にたいする回答いかに係っている。すなわち経済危機の自然的結果だけではなく、一連の威信喪失の自然的結果でもある諦めは、永続的な現象であるのかどうか。二世紀の長きに及ぶ革命的伝統は、共産党への投票と同じように、かくも容易にまた永続的に解体しうるものなのかどうか、という問題がそれである。後者の崩壊については、たまたまわれわれはこれまでのところその否定



的结果、つまりそれが支配的イデオロギーの強化をもたらした作用だけを見てきた。いかにしてこの空白が充されるべきかの問題を考えることが残されている。もしソビエト・モデルがそうしたものとしては、明らかに破壊されたとするならば、ペレストロイカ以来ソビエトの負の効果(Soviet bogey)はもはや傷跡を残してはいない。ムードの変化を示す漠然とした徴候がある。目立ったものとして1986年末にかけての学生のデモンストレーションと自然発生的ストライキは、若い世代が言われているほど完全にアメリカナイズされてもいず、従順でもないことを示唆している。ミッテランの正常化は、結局短命に終わることが実証されるかもしれない。

だが今求められているのは、一国の枠内に局限された単なる反乱より以上のものである。まず始めに、それは西ヨーロッパの労働人民にアピールする巨大な計画である。まったく異なった環境の中での冬宮の権力掌握の再現を期待する後向きの計画は問題外である。勤労人民の呼応を引出すためには、その計画はロボットとコンピューターの時代における労働と余暇、文化とコミュニケーションといった問題を取扱わねばならない。1968年の人々がぼんやりと意識していた様々な諸問題、すなわち宇宙における我々の位置、核の世界における生残り、今日及び将来社会における婦人の新しい役割といった諸問題に直面しなければならないであろう。5月が失敗したところで、作業場でも農村でも、全体として組織と民主主義の新しい形態を発明することに成功しなければならないであろう。課題は疑いもなく巨大であるが、運動がそれ自身の論理を再主張し、言立てられている市場の有益な支配、利潤の知恵、現在のところ挑戦を受けていない資本の支配と衝突する用意を進んで引受けるまでは、その課題の遂行に着手する事はないであろう。

「現実的であれ、不可能を問い求めよ」という1968年のメッセージは、もしそれが空想への逃避のごとく詩的に解釈されるのでなければ、今日にとってもいぜんもっとも適切なメッセージであり続ける。可能なことの限界は、我々にとって何時でも我々の環境、メディア、学者や唱道者によって定義されつつあるが、それはわれわれの社会が辛抱する用意があるところのものである。申立てられる「不可能」は社会主義の古典的ジレンマ、すなわちそれが提起する諸問題とそれが遂行しなければならない闘争とは現存社会の中に根差している一方で、与えなければならない回答は究極的にこの社会の限界を超えた所に横わっているという、あのジレンマに真直ぐに我々を導く。右翼は今日それが提供するものによってではなく、他のヴィジョン、ラディカルなオールドナティブの欠如のゆえに世界で優勢である。

多くの偉大な期待が大きく傷ついたので、私は何らかの予測をもって終わるのではなく、ただ二つの短評をもって本稿を終えることにしたい。第一のことはむしろ陰鬱である。かり



に現存の秩序が「砂のうえに建てられた」としても、これに代わる我々自身のものが成熟し、引取る用意ができていくということを意味しない。第二のことは用心深い楽観主義の見直しである。フランス人は、「歴史は二度目の助けを与えない」というけれども、これは明らかに全く不正確である。障害は時間の概念がわれわれの忍耐力のない計算とは異なっているということである。われわれが痛切に学んだように、不毛な年月は7でなくむしろ20で測られる。それだけにますます見たところ不動の長い中間期のあいだに、たゆみなく代替案を準備して、1968年のように歴史が我々に行動に立つべく標識で示した時に、特典を与えられた瞬間にその指名を逃さないように備えるべき十分な理由があるのである。

- 〔注〕 1. Daniel Singer, *Prelude to Revolution, France in May 1968*, New York: Hill & Wang, 1970
2. Herve Hamon / Patrick Rotman, *Generation. II les ammees poudre*, Paris: Seuil, 1988, pp. 640-642
3. 例えばフランス共産党25回大会でのジョルジュ・マルシェの演説 (*L'Humanite*, Feb. 7. 1985)をみよ。
4. このような選挙での低落の前例があったことは確かである。地方選挙で40%に近づき1951年の議会選挙でなお20.4%を集めたドゴール派は5年後の議会選挙でわずか4.4%を得たに止まった。だがドゴール派は通常の政党ではなかった。彼等はドゴール將軍の周囲に集まった寄合い所帯(フランス人の集合体またはRPF)であり、1956年までにかれの最初の攻撃は撃退され、將軍は軍営に退却し、あるいはむしろコロムベ・レ・ドゥ・エグリーズ(*colombey-les-deux-Eglises*)に隠生した。
5. Daniel Singer, *Is Socialism Doomed ? The Meaning of Mitterrand*, New York, Oxford University Press, 1988.

### 《訳者あとがき》

本論説の筆者シンガーは本文にあるように、フランスの「5月革命」の年に『革命への序曲、1968年5月のフランス』を著わし、他に『グダニスクへの道』と、今年『社会主義は失敗を運命づけられているか？ ミッテランの意義』をいずれもニューヨークで刊行している。ヨーロッパの現代政治を研究しているアメリカの政治学者という以外には訳者はこの筆者のくわしい経歴は知らない。なお『マンスリー・レビュー』誌本年7月号に掲載されたこの評論は、編者注によると、今年秋刊行のジャック・トラムブール(*Jack Trumbour*)編集になるフランスとドイツの政治に関する年報に収録される予定とのことである。

論者もいうように、記念日をどう祝うかはしばしば象徴的な意味をもっている。今年5月フランスでは大統領選挙および国民議会選挙がおこなわれたが、結果は大統領選ではミッテランの圧勝、ル・パンの極右党の進出、そして共産党の極右の風下に立つ7%政党への転落—議会選挙ではようやく27議席を確保して一応面目を回復したが—、議会選挙では予想された社会党の単独過半数獲得ならずといったものであった。なかでも印象的なのは、かつてはレジスタンスと救国の党としても人望が高く、つねに断然第一党の地位を長い間保持していた共産党の5月事件以後の急速な凋落ぶりであり、ユーロ Kommunismusの旗手イタリア共産党にも「フランス共産党シンドローム」が浸透しつつあると聞く。世の変転に感慨なきをえない。

思えば1968年は国際的に重要な事件が合流した年だった。パリの5月事件とほぼ同時期に「人間の顔をした社会主義」を掲げた「チェッコの春」がソ連軍の戦車で押しつぶされた。ソ連内部ではフルシチョフの改革が挫折し、スターリン復権の反動が勢いをえ、制限主権論に立つブレジネフ・ドクトリンが東欧の改革と民主化の動きに厳しい枠をはめた。日本の左翼陣営では折からの中国の「文化大革命」のあおりも重なって、新左翼は急進化し、分裂に分裂を重ねていた。私もその流れの中にいた新左翼の一翼だった「構造改革派」にとってはまことに重苦しい一時期であった。

西欧での学生反乱は、パリの5月に先立つ一年前の67年6月西ドイツを発火点とした。この時イランのパーレビ国王の西独訪問に抗議する学生運動が全国に起こったが、西ベルリンではベルリン自由大学の一学生が抗議デモの最中に警官の発砲によって死亡したことが契機になって、大学改革を要求する西ドイツの学生運動が盛り上がった。これが前駆となり、68年5月のパリ学生の蜂起につながった。だが本論説にも強調されているようにこれは revolt であって revolution ではなかった。西ドイツでは学生の孤立した抵抗運動に終わった——といってもこの学生運動は SPD(ドイツ社会民主党)青年部の急進化を通じて SPD 内の左翼グループを強化し、西ドイツ社会に一定のインパクトを及ぼした点は看過できないが——のに反して、フランスでは学生運動は労働運動と呼応して一時は支配体制をゆさぶる政治危機に発展した。その経過とフランス社会に残した痕跡は本論説に詳述されている通りである。

結局パリの5月がフランス経済社会にもたらしたのは「賃金爆発」であり、レグラシオン派好みの用語を用いるなら、フォード主義的労働関係の仕上げであった。それは必ずしも位相を同じくするとはいえないが、わが国の1960年の安保斗争が池田内閣の所得倍増計画と高度成長への転換の契機となったのに対比されよう。68年「パリの5月」は、翌年のイタリアの「熱い秋」の労組の賃金斗争に波及し、大陸ヨーロッパ一円のいわゆる「賃金爆発」に導

いた。それがヨーロッパの戦後経済繁栄を終焉に導いた各国民経済のスタグフレーション体質への転化の劃期となったことは特記しておくべき点である。それにしても5月反乱がその後程なく訪れることになる真の経済危機の渦中ではなく、むしろ戦後長く続いた経済繁栄の末期で、経済成長期の只中で生じたという点は、その後のフランス左翼の運命の転変を見る上で注目すべき一視点であろう。

わが国の知識人とりわけ左翼知識人には総じてフランス好みというか、フランス最良があり、フランスに生じた事象はことごとく好ましいもの、プラス価値であり、見習うべき範例として一面的に賞揚するという習性が見受けられるようである。だが私が西ドイツに一年間滞在して現地で实地に即して独仏両国の対比的観察を試みた結果の印象では、フランスは西ヨーロッパでも特異な国と映り、そこにみられるのは先進的現象というより、多くはその社会体質の伝統主義的で古い遅れたものの表出であることが了解されたのである。私が西ドイツに滞在した1975年、当時の西ドイツ宰相ヘルムート・シュミットは、「西ドイツ・モデル」をフランス人に推賞したほどである。これは明らかに西ドイツの社会制度の先進性の自負の表白であったのだが、これは時宜に適しない勸告であった。というのは肝心の西ドイツ自体が当時「社会国家」の限界、その内在的矛盾の表面化に逢着していたからである。それはともかく、本論説にもふれられているが、実質的差異がない事柄で左右両翼の敵対的対立と対話不能、「中道の蔑視」の政治風土、社会保障をふくむ勤労階級の労働諸条件の立ち遅れ、パリへの一極集中の極度の集権主義と保護主義的制度的硬直性等々。これらの諸点では北欧と並んで西ドイツはフランスより先進的であると見受けられる。それはあるいはダーレンドルフのいうように「ナチスの思わざる社会革命」(R. Dahrendorf, *Gesellschaft und Demokratie in Deutschland*, 1971, 3. Aufl. 1968, s. 416)の落し子であるのかも知れないが、これらの点は Pro-France でも Pro-Germany でもなく、醒めた眼で今後比較検討すべき問題であろう。本論説の著者は、このような距離を置いた冷静な眼でフランス左翼の存在理由を探究しているその姿勢は、われわれ日本の研究者にとって参考になるところが少なくないであろう。

最後にフランス左翼の今後の展望に関連して、本論説に二つの補足的私見をつけ加えておこう。第一のものはより悲観的であり、第二のものはより「慎重な楽観主義」の見通しを語ることになるであろう。

第一に、著者はソビエト・モデルの破綻のフランス左翼への負効果に関して、「ペレストロイカ以来ソビエトの負の効果 (Soviet bogey) はもはや傷跡を残してはいない」と評価している。この判定は楽観的にすぎる希望的観測にもとづく断定であるように思われる。たし

かに仏伊両共産党を分つものは、フランス共産党のソ連依存と余りにも長引いたソ連共産党からの政治的・イデオロギー的訣別への逡巡であり、その結果としての党勢の急降下であったのは事実である。だがソ連モデルの破壊がゴルバチョフのペレストロイカによって「ソヴェト・ボギー」の負効果が出尽して「もはや傷跡を残していない」と言えるであろうか。わが国の左翼の政治的・イデオロギー的風土をみるにつけ、この国の左翼知識人がいわば魂の抛り所としてきた彼の国で、ソ連モデルの負効果が出つくしたなどとはとても信じられない。ペレストロイカとグラスノスチ（情報公開）はまだ始まったばかりであり、それを通じて革命後70年を経たソ連社会主義の経験と現状の否定的側面が生々しく現実具体性をもって語られ暴露され始めているのをわれわれは眼前にしている。その中にはほとんど信じ難いほどの真実が知られてきている。それはわれわれを深い沈黙に誘うものばかりである。そしてペレストロイカの前途多難を思わせる—その成功を人一倍望むものではあるが。ソ連モデルの負効果はまだまだこれからも逆風として左翼に吹きつけるであろうことを覚悟しておくべきだろう。その逆風に打勝つのは、左翼がソ連モデルから絶縁して、かつての社会主義が目指した基本的諸価値を市民社会の現代的位相を踏まえて再生せしめる大胆で、創意に富んだ alternative を構想し提示しえた時のみであるであろう。その時がそう手近にあるかどうかはまったく定かではない。

第二に、著者は終りのところでフランス左翼の今後の緊急課題として「一見したところ不動不変に思える長い中間期間のあいだに、たゆみなく代替案を準備し、決定的瞬間に備える」べきことを提起している。その点については、すでにあの5月反乱当時学生ないし大学院生であった若い世代が育ってきて、その代替案構築の理論的営為が活発に進められているということを指摘しておくべきであろう。それは例えば J・アタリの将来社会展望としての「相互交通社会」をエネルギーと情報の社会科学を通して展望しようとする試み（Jacques Attali, *La Parole et l'outil*, Paris, 1979. 平田清明・斉藤日出治訳『情報とエネルギーの人間科学』日本評論社, 1983年）、M・アグリエッタ、A・リピエッツ、R・ボワイエ等いわゆるレグラシオン学派の理論的試行にその萌芽を読み取ることができるように思われる。今のところ彼等の所説は、部分的にはマルクス経済学研究の豊かな蓄積を有するわが国の研究者の眼からみて、舌足らずな箇所や欠落環が目につくとしても、右の基本的課題へ向けて理論と実証を積み重ねる彼等の理論的営みの実践的姿勢に注目すべきものがある。聞くところによると彼等は40歳そこそこの「5月革命」の体験を出発点として研究生活を始めた若い世代であって、わが国の経済企画庁に当たる中央政府機関に入って実証分析と計画策定に積極的に関与し、その成果を学界にフィード・バックして集団的な研究を推進しているそうである

(平田清明氏よりの伝聞による)。このような政策実践と学界での理論活動のフィード・バック回路の存在は、フランスだけでなく、私の知る限りでも西ドイツ・イタリアなど西ヨーロッパ先進諸国にはおしなべて確立されている。わが国の現状と対比して、これら近代社会形成の先進諸国にはやはり「理性にしたがって社会を自律的に形成する」という知的伝統の健在なことを知らされ、ヨーロッパに学ぶ——アメリカ辺倒でなく——必要を痛感させられた次第である。

フランス左翼の動向については、わが国でもその理論＝思想動向については平田清明氏やその門弟に当る人々によって紹介されており、またその具体的動向については折にふれて藤村信氏のパリ通信を通じ報ぜられている。しかし本論説は以上述べた理由によりそれらとは別個に紹介する価値があると思われる。本訳業は今年7月初め『マンズリ・レビュー』誌で本論説を知り、早速同編集部に掲載の許可を求めたところ、夏休み終り頃の8月下旬に快諾をえて着手した。この間先決を要する仕事が重なって、訳業は断片的な自由時間を縫って少しずつ進められ、この程ようやく完了した。本訳稿を読者諸氏が、かくも疾く過ぎ去った、この波瀾に富む20年を、自らの体験と共に省察される上での他山の石とされるならば幸いである。

——1988年11月14日記——

## <編集後記>

毎年12月通年講義の最終回を迎えるこの時期になると、一年が終わったという実感が味わえるのは、大学教師に与えられたささやかな慰安というべきだろうか。講義が終わる頃になって、にわかには聴講生の数が増えてくるのも歳末風景の一つになった。「社研月報」の編集は3月年度末なので、もう一つ解放されたという気分になれないが、それでも今年出た12冊を並べると、若干の感慨がなくはない。全体としては昨年のような焦点はなかったが、今年の特徴は翻訳と解題が多かったことだろう。それに比較的順調に刊行できたことであるが、これは所員の皆さんが頑張って下さったからである。しかも回転がよくなると、ある程度活字になる時期が確定するので、原稿を出す方にもプラスなのかもしれない。何れにしても2か月分の原稿を抱えて年を越すというのは、そう減多にあることではなさそうである。月報の原稿の出方は、アフリカの降水に似て雨季と干季の差が大きく、編集泣かせであるが、今年は雨季の貯金でしのげるかも知れない。

12月に持たれた社研総会で、編集の在り方についても検討事項が提起された。年報論文のレフリー制度と所外寄稿についてであるが、いずれも以前から指摘されながら手が下せなかった問題だと思われる。審査の面よりも研究や議論の活性化に重点をおいて検討されれば良い結果につながるのではないだろうか。月報についても問題が提起されれば有り難い。

今月号はパリの五月事件とその後の20年の意味を、政治学者の目で別抉した論文の紹介であるが、訳者あとがきともども玩味して頂けたらと思う。

本年一年の御支援を謝し、一層の御発展を祈ります。 (T・M 63・12・13)

---

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話(044)911-7131(内線2818)

専修大学社会科学研究所

(発行者) 三輪芳郎

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話(03)404-2561

---